

令和二年度 特別入学試験 小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は表紙を含めないで2ページあります。解答用紙は3枚です。下書き用紙は1枚あります。
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 試験開始の合図があつたら、まず、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
- 4 解答はすべて解答用紙のそれぞれの解答欄に記入してください。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 解答用紙は記入の有無にかかわらず、持ち帰ってははいけません。
- 7 この問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読み、問いに答えなさい。

ある意見が、いかなる反論によっても論破されなかったがゆえに正しいと想定される場合と、そもそも論破を許さないためにあらかじめ正しいと想定されている場合とのあいだには、きわめて大きな隔りがある。

自分の意見に※反駁・反証する自由を完全に認めてあげることこそ、自分の意見が、自分の行動の指針として正しいといえるための絶対的な条件なのである。全知全能でない人間は、これ以外のことから、自分が正しいといえる合理的な保証を得ることができない。

世論の歴史と普通の人間の営みを眺めてみよう。そのどちらもが現在もそうだが、大きく道を逸れたりしないのは、何のおかげなのだろうか。

それはけっして人間の知性に備わる力のおかげではない。なぜなら、自明といえない問題を前にすると、是非を判断する能力がある者は百人中一人ぐらいで、残りの九十九人はまったく判断の能力がないからである。しかも、その一人ですら、その能力は相対的なものにすぎない。昔の時代の偉人とされるひとびとの多くが、現在では誤りだと知られている意見を持ち、いまだでは誰も正しいと認めないようなことを、たびたびおこない、あるいはたびたび承認したのである。

それでは、なぜ合理的な意見と合理的な行為が、全体として、人類のあいだで優勢なのだろうか。

このような優勢が事実であるとすれば———というか、人間の生活は過去も現在もずっと悲惨な状態にあるわけではないのだから、それは事実であるにちがいないのだが———この優勢は人間の精神のひとつの特性のおかげである。すなわち、人間は自分の誤りを自分で改めることができる。知的で道徳的な存在である人間の、すべての美点の源泉がそこにある。

人間は経験と議論によって、自分の誤りを改めることができる。ただし、経験だけではダメである。経験をどう解釈すべきかを知るために、議論が必要だ。間違った意見や行動は、事実と議論によってしだいに改められていく。しかし、人間を心底から納得させるには、事実と議論をはつきりと示してあげなければならない。事実を見ただけで意味がわかることはめったにない。その意味を理解するには何らかの解説が必要なのである。

人間が判断力を備えていることの真価は、判断を間違えたとき改めることができるという一点にあるのだから、その判断が信頼できるのは、間違いを改める手段をつねに自ら保持している場合のみである。

その人の判断がほんとうに信頼できる場合、その人はどうやってそのようになれたのだろうか。

それは、自分の意見や行動にたいする批判を、つねに虚心に受けとめてきたからであ

る。どんな反対意見にも耳を傾け、正しいと思われる部分はできるだけ受け入れ、誤っている部分についてはどこが誤りなのかを自分でも考え、できればほかの人にも説明することを習慣としてきたからである。ひとつのテーマでも、それを完全に理解するためには、さまざまに異なる意見をすべて聞き、ものの見え方をあらゆる観点から調べつくすという方法しかないと感じてきたからである。じっさい、これ以外の方法で英知を獲得した賢人はいないし、知性の性質からいっても、人間はこれ以外の方法では賢くならない。

他人の意見と対照して、自分の意見の間違いを正し、足りない部分を補う。これを習慣として定着させよう。そうすると、意見を実行に移すときも、疑念やためらいが生じない。それどころか、この習慣こそが意見の正当な信頼性を保証する、唯一の安定した基盤なのである。

(ジョン・スチュアート・ミル 著『自由論』・斉藤悦則 訳／光文社古典新訳文庫)

※反駁・・・他人の主張や批判に対して論じ返すこと

問一 本文の論旨を二〇〇字以内で書きなさい。

問二 傍線部Aは、どのようなことか、本文から推測して二五〇字以内で示しなさい。

問三 傍線部Bについて、自分(もしくは自分たち)が正しい答えに近づいたと思われる体験を四〇〇字以内で書きなさい。